

Ossi-Witz と DDR-Witz

— インターネットの中のHeimat —

佐藤裕子

0. 序

ベルリンの壁が崩れ、東西ドイツが統一されてから間もなく Ossi-Witz というジャンルが誕生した。これらの Witz は統一後のドイツ社会の現実を反映しつつ、Ossi (東ドイツ人) と Wessi (西ドイツ人) の姿がそれぞれステレオタイプ化されて展開する。その後、「心の壁」や「オスタルギー」という表現が広く使われ始めるのに伴い統合前の SED 独裁体制下での DDR-Witz が再び語られ、収集されるようになる。この現象はインターネットの中で顕著に観察され、例えば2003年1月現在、DDR-Witz に関するウェブサイトは約550を数えている。Witzに加えてDDRに関するサイトもまた数多く開かれ、当時の家具や電気製品の販売から、マッチ箱や切手など当時の人々の生活を伴っていた様々な「もの」の展示、国家保安省の Who's who まで多岐にわたったDDRに関する情報が提供されている。それは1990年に消滅した国家がヴァーチャルな世界において存在し、西側の物質文明の消費生活への強烈的な願望の陰で、かつて惜しげもなく捨て去られたDDRの日常文化がルネッサンスを迎えたかに見える。Ossi-Witz も DDR-Witz も、統一後のドイツ社会における旧東ドイツの人々の Identität の模索や再構築と深く関連しているのではないだろうか。本稿ではこれらの Witz を通して、統一後12年を経過したドイツ社会の中で、統計調査の数値として表れない旧東ドイツの人々の Identität の中身を探っていきたい。

なお本論を進めるにあたり、Witz という言葉はドイツ語表記のまま使用し、政治ジョーク、エスニックジョークなどのようにジョークの大きなカテゴリーを表す場合にはジョークという表現を用いることとする。

1. Ossi-Witz と Wessi-Witz

1989年にベルリンの壁が崩壊し、その翌年に東西ドイツが統一されてドイツのWitzに新たなジャンルが加わることとなる。それまで西ドイツではOssiという言葉は東フリースランド人を指し、従って従来のOssi-Witzは東フリースランド人を笑いの標的にしたものであった。統一後はOssiという名称がWitzの中で東ドイツの人たちの呼称として定着したが、そこでのOssiも「時代遅れ」、「愚鈍」というようなかつてのOssi-Witzの東フリースランド人と極めて類似した性格づけがされている。Ossi-WitzはBlondienen-WitzやManta-Witz¹と同様、エスニックジョークに分類される。エスニックジョークは一つの民族グループやバイエルン人、シュヴァーベン人など一定の地方に居住する人々を笑いの対象とするか、あるいはその地方で広く語られるジョークである。例えばバイエルン人Witzはバイエルン人を笑うWitzとバイエルンで語られるWitzの両方を指すが、Ossi-Witzは東部ドイツ人が笑いの対象となったWitzであり、また東部ドイツで語られているWitzでもある。同様にWessi-WitzはWessi（西ドイツ人）を笑うWitzでもあり、西部ドイツで語られるWitzでもある。但しOssi-WitzやWessi-Witzの場合、その内容は統一や統一後の現実、あるいはステレオタイプとしてのOssi、Wessiをテーマにしたものに限定される。

a. Warum sagt man nicht blöder Wessi?

Man sagt ja auch nicht weißer Schimmel.

なんで「おバカなヴェッシー」っていわないんだい？

白白白馬って言わないのとおんなじだよ。

1 マンタはマンタエイを彷彿とさせる薄く低い車体を持ったオベル社のスポーツタイプの車種で、その車の愛好者はいわゆる軽薄、見栄っ張り、スピード狂など様々な強調かつ戯画化された性格が付与され、Manta-Fahrer（マンタに乗る男）をテーマにしたWitzは1988年から1991年の間流行した。Manta-Witzに関しては、Rolf Wilhelm BrednichとChristine StreichanのDer Manta-Witz. Ein Autokult und seine narrativen Folgen. (In: Volkskunde in Niedersachsen. Göttingen: 8/1991, S.34-43)に詳細な研究が発表されている。

- b. Ossi und Wessi am Oststrand.
Wessi: „Sehen Sie mal, da vorn geht der Rettungsschwimmer, der mir heute vormittag das Leben gerettet hat.“
„Ich weiß.“ Sagt Ossi, „Er hat sich schon bei mir entschuldigt.“
オッシーとヴェッシーがバルト海の海岸で
ヴェッシー:「ほら、あそこを今朝私の命を助けてくれたライフセーバーが歩いてる。」
「わかっていますよ。」とオッシーが言った。「もう私にあやまってくれましたから。」
- c. Wessi hat ein Geschenk für Ossi gekauft. Die Verkäuferin: „Soll ich das Preisschild abmachen?“
Wessi: „Nein, nein, schreiben Sie noch eine Null dazu!“
ヴェッシーがオッシーに贈り物を買った。店員:「値段のシールを取っておきましょうか。」
ヴェッシー:「いやいや、ゼロを一つ書き足しておくれ。」
- d. Ein Ossi erzählt einem Wessi einen Wessi-Witz.
Sagt der Wessi: „Sie wissen wohl nicht, dass ich Wessi bin?“
„Ach Entschuldigung, ich fang nochmal an und erklär dann die Pointe.“
オッシーがヴェッシーにヴェッシー Witz を話す。
するとヴェッシーが言った。「私がヴェッシーだってこと知らないのかね。」
「これは失礼。じゃあ、もう一回初めにもどって、オチも説明してやろう。」
- e. „Was sagt im Osten ein arbeitsloser Philopsoph zu einem Philosophen, der noch Arbeit hat?“
„Eine Currywurst bitte, Herr Professor!“
東で失業中の哲学者がまだ職がある哲学者に向かって言う言葉は？

「先生、カレーソーセージをひとつ。」

f. Der kürzeste Witz:

Zwei Ossi treffen sich bei der Arbeit.

一番短い Witz :

二人のオッシーが職場で顔を合わせた。

g. Ein Westler, drei Ostler und fünf Ausländer logieren in einem Wohnheim; hier ist die Elektroanlage genauso marode wie die Gasleitung undicht. Eines Vormittags gegen elf Uhr gibt es eine entsetzliche Explosion. Das Haus fliegt in die Luft. Nur einer hat Glück und bleibt wie durch Wunder unverletzt: der Westler. Klar! Er war um elf natürlich nicht zu Hause; denn er hatte als einziger eine Stelle.

西ドイツ人がひとり、東ドイツ人が3人、外国人が5人、寮に住んでいた。そこは電気設備もガスの配管もいかれてしまっていた。ある日の午前11時頃のこと、すさまじい爆発があって家は吹っ飛んでしまった。その中でたったひとりだけ、幸運にも奇跡のように生き残ったのがいた。当然それは西ドイツ人だった。午前11時になんてむろん家にいるはずもない。その中でたったひとり働き口があったのだ。

h. Ossi zum Türken: „Hey, wo geht’s denn hier nach ALDI?“

Türke: „Zu Aldi!“

Ossi: „Was denn? Halb drei schon zu?“

(翻訳不可能：オッシーがトルコ人にディスカウントスーパーマーケットのALDIへの道を聞こうとするのだが、„zu ALDI“ と言うべきところを „nach ALDI“ と言って、本来母国語であるドイツ語のあまりにも初歩的な文法の誤りを、外国人であるトルコ人に „zu ALDI“ と直され、それをまた「閉まっている」という意味に誤解するという言葉の Witz である。)

- i. Woran erkennt man, ob ein Fax von einem Ossi geschickt wurde?

Eine Briefmarke drauf.

「オッシーからファックスが来たってどうやってわかる？」

「切手が貼ってあるからさ。」

- j. Auch in den Schulen im Osten soll jetzt der Unterricht mit Computern eingeführt werden. „So, liebe Kinder,“ sagt der Lehrer, „wieviel sind drei Computer und vier Computer?“

東の学校でもコンピューターを使った授業が行われるようになった。

「さて、みんな。」と教師が言った。「コンピューター3つにコンピューター4つをたすと、いくつになるでしょう。」

ここに紹介したのはOssi-witz（あるいはWessi-Witz）の一部であるが、これらのWitzはいわゆる笑いの対象人物をステレオタイプ化して笑い、悪態をつくもの（a,b,c,d,h,i,j）と統一後の社会的現実を表したもの（e,f,g）とに分類される。ステレオタイプとしてのOssiは愚かで、時代遅れ、単純、多くは失業中であり、Wessiは不誠実で狡猾、冷淡な物質主義者として登場する。

Witzにはオリジナルなものは極めて少なく、内容的には30から40種類しか存在せず、すべてはそのバリエーションから成り立っているとされているが、Ossi-WitzもManta-WitzやBlondinen-Witzと内容的に共通するものが多い。例えば「Witzをゆっくり話してやる」と言って相手を揶揄するWitz(d)やALDIのWitz(d)はManta-Witzに同様のものがあり、dにおいては後述する人民警察のWitzにもある。またファックスのWitz(i)はBlondinen-Witzにもある。Witzの中のマンタに乗る男は学歴優先社会の中での愚かで滑稽な学歴弱者として登場し、ブロンド女もコンピューターやファックスの使い方を全く理解しない、自分の容姿や前時代的なセックスアピールが唯一の関心事である、IT社会の中で全く異質な存在の社会的弱者である。むろんManta-Fahrerもブロンド女もフィクションであるが、その延長線上にあるのがOssi-Witzの中のOssiであ

る。

Ossi-Witzに欠くことのできない存在がWessiである。Ossi-Witzと同じくWessi-Witzもまた悪態に満ちている。つまりOssi-WitzとWessi-Witzは悪態の応酬であり、Manta-WitzやBlondinen-WitzがWitzの対象人物に対する一方的な嘲笑であるのに対し、Ossi-Wessi-Witzは笑われた存在がそれぞれ笑う側にある人間に対し、Witzで一糸報いるのである。

これらのWitzの笑いは多くの場合、非常に攻撃的な笑いである。笑いの攻撃性、武器としての笑いに関しては多く論じられてきたが、Witzの笑いの攻撃性が凝縮されて、実際の攻撃的な行動に繋がることは考えがたい。むしろここでは安全弁として機能していると考えられる。Ossi-Witzが生まれる社会的現実には確かに存在するが、東ドイツの人々はWessiの傲慢さや冷徹さ、計算高さを笑うことによって、統一後自分たちが置かれた現実から解き放たれ、たとえそれがつかの間であっても優越感を味わうことができる。そしてWitzで笑うことによって先の見えない厳しい現実の中で感情が凝縮するのが回避されるのである。ここで興味深いのはWitzの中でドイツ社会がまずOssiとWessiに2分化され、さらに、ALDIのWitz (h) や爆発した寮のWitz (g) のようにAusländer (外国人) が加わり、ドイツ社会の構成員がOssi、Wessi、外国人の3つのカテゴリーに分類されるということである。

2. DDR-Witz

Ossi-Witzと並行して主に東ドイツで語られているWitzにDDR-Witzがある。Ossi-Witzが統一後のドイツの社会状況をテーマにしたエスニックジョークであるのに対し、DDR-WitzはSED独裁下の旧東ドイツの政治ジョークである。政治ジョークはTendenzwitz² (傾向Witz) であり、Witzの傾向は政府や体制、権力を持った政治家に向けられている。その社会の中で住民の自由が極度に制限され、抑圧された閉塞状態で他に通気口がなければいほど、政治ジョークは鋭さと攻撃性を増す。従って

2 Vgl. Freud, Sigmund: Der Witz und seine Beziehung zum Unbewussten. Frankfurt am Main: Fischer Taschenbuch Verlag, 1988, S.179.

非民主的な独裁体制は政治ジョークが栄える格好の環境と言える。言論の自由が束縛された SED 体制下の DDR で風刺精神が発達し、豊かな Witz の文化が栄えたのは想像に難くない。

DDR-Witz をその内容別に分類すると、以下のように大別される。

1. ホーネッカー、ウルブリヒト、フルシチョフなど権力者を扱ったもの。(k)
2. ロシア人に関するもの。(l)
3. 人民警察や国境監視員を扱ったもの。(m,n)
4. DDR の日常的な現実を扱ったもの。(o)

k. Honecker fährt durch die DDR. Vor einer schönen Villa spielt ein kleiner Junge.

Honecker: „Mein Kleiner, wem gehört das schöne Haus?“

Junge: „Uns!“

H.: „Das habt ihr mir zu verdanken! Und wem gehört die Garage mit dem neuen Wartburg?“

J.: „Das gehört alle uns – und im Harz haben wir auch noch eine große Datscha.“

H.: „Das habt ihr alles mir zu verdanken!“

J.: „Mutti, Vati, kommt her, Onkel Hans aus Hamburg ist da!“

ホーネッカーが DDR 国内を廻っていた。とある一軒の瀟洒な家の前で男の子が遊んでいた。

ホーネッカー：「坊や、このきれいな家はだれのものだね。」

男の子：「僕らのだよ。」

ホーネッカー：「それはみんな私のおかげなのだよ。それからあの新しいヴァルトブルクが停まっているガレージはだれのだね。」

男の子：「あれもぜんぶ僕んちのだよ。」

ホーネッカー：「それもこれもぜんぶ私のおかげなのだよ。」

男の子：「父さん、母さん、早く、早く、ハンブルクのハンスおじさんが来たよ。」

1. Ein Ami, ein Russe und ein Ossi sitzen im Zug. Plötzlich fängt der Ami an, Kaugummi aus dem Fenster zu werfen. Gucken ihn die andern beiden entsetzt an: „Was soll denn das?“
„Och, wir haben genug Kaugummi!“
Der Russe will sich nicht lumpen lassen und wirft eine Flasche Wodka aus dem Fenster. „Wir haben genug Wodka!“
Die beiden schauen daraufhin den Ossi an: „Und ihr? Wovon habt ihr genug?“
Der Ossi überlegt kurz, packt den Russen an den Beinen und wirft ihn aus dem Fenster.
アメリカ人とロシア人と東ドイツ人が汽車に乗っていた。すると突然アメリカ人がチューインガムを窓から放り投げだした。他の二人があきれてそれを見て言った。
「いったいなんてことをするんだい！」
「かまうもんかい。アメリカじゃガムは腐るほどあるからな。」
ロシア人も負けずにウォッカの瓶を窓から投げ出して言った。
「ロシアにゃウォッカは腐るほどあるのさ。」
それから二人は東ドイツ人に目をやった。
「東ドイツじゃ、何が腐るほどあるのかな。」
ちょっとの間考えた東ドイツ人は、ロシア人の両脚をつかんだと思ったら列車の窓から投げ落とした。
- m. Zwei Grenzer auf Streife an der Mauer mit Blick auf den Westen.
„Was denkst du gerade so?“
„Das Gleiche wie du.“
„Dann muss ich dich leider festnehmen.“
国境監視員がパトロール中にふと西側に目をやって言った。
「なあ、今何を考えてるんだ？」
「おまえと同じことだよ。」
「残念ながらおまえを逮捕する。」

- n. „Du, ich erzähle Dir einen politischen Witz.“
„Pass auf, ich bin bei der Polizei.“
„Ja, ja, ich erzähle auch langsam.“
「政治ジョークを話してやろうか。」
「おいおい、おれは警官だぜ。」
「わかってるって。だからゆっくり話してやるからさ。」
(DDR-Witz, d 参照)
- o. Was macht ein DDR-Bürger, wenn er in der Wüste eine Schlange antrifft?
Er stellt sich an!
DDR市民が砂漠でヘビをふんづけたらどうするか?
そこに並ぶさ。
(Schlange = ヘビと sich an die Schlange stellen = 列に並ぶをかけた言葉ジョーク。)

政治Witzでは抑圧された側が抑圧者を笑うことによって、日常の立場の逆転が起き、たとえそれが虚構の産物であっても一瞬、優越感を味わうことができる。この場合、笑いの攻撃性は独裁体制の中での権力者に向けられる。DDR-Witzの場合、笑いの対象になるのはホーネッカーであり、ロシア人であり、人民警察であった。

それではこれらのWitzは社会の中でどのように機能していたのだろうか。「武器としてのWitz」(Witz als Waffe)という言葉があるように、特に政治WitzにおいてはWitzが同士を募り、Witzの聞き手が笑いの標的にされた人物や体制を憎み軽蔑するようになり、結果的には権力者に対する抵抗の道具となりうる。攻撃的なWitzを聞いて笑うことは、潜在的な同盟者であるということを表明することであり、また人はそのWitzの傾向に対する合意があるときのみ、Witzを聞いて笑うのである³。笑いには確かに攻撃性が存在し、Witzに対する笑いはその内容に対する

3 Vgl. Schmidt, Andreas: Politische Autorität im Witz. Marburg: Dissertations Druck, 1988, S.49.

「ある一つの合意」(ベルグソン)⁴が存在することを前提にしているが、DDR-Witzの笑いも Ossi-Witzの場合と同様に、それが実際の体制への抵抗に繋がることはなく、むしろここでも Witzは安全弁として機能し、さらに「われわれ意識」や Identitätの確認や創出といった機能を果たしていると考えられる。

人々の自由が極度に制限された独裁体制の下、抑圧者を標的にした Witzを語り、笑うことによって凝縮した感情が解放され、緊張が緩和される、そうすることによって再び厳しい抑圧状況を耐えることが可能になるのである。従って攻撃は言葉の上にとどまり、実際の抵抗へとは繋がっていない。Witzの効果としてはむしろ現状維持の方向へ作用するのではないだろうか⁵。ただ Witzを語り、それを聞いて笑うためには、その場にいるグループのメンバーが同じ笑いのコードを共有することが前提である。つまり Witzを語るという行為が、すでに了解済みのグループの Identitätを確認し、さらにわれわれ意識を創出していく⁶。

Witzの傾向性が強ければ強いほど、つまり攻撃性を持った Witzであればあるほど、あるいはそのテーマが体制にとって危険であればあるほど、Witzはグループの笑いのコードの許容範囲の境界線を探りながら語られる。(例えば m の逃亡を扱った Witz など) 統一前の東ドイツでは、Stasi の監視体制が縦横に張りめぐらせられ、社会主義国家の組織に個人の生活が組み入れられていた。市民の間ではその社会の一員としての公的な「連帯感」と、独裁体制下の現実をともに耐え、本音を共有するという我々意識とが共存していたのではないだろうか。

3. インターネットの中の DDR-Witz

これらの政治ジョークはまだ東ドイツが存在していた頃、職場の食堂や家族の祝い事の席や酒場、党大会などで密かに語り楽しまれていたようであるが、現在はインターネットの中でその多くが掲載されている。

4 アンリ・ベルグソン (林達夫訳):『笑い』、岩波書店、1976年、17ページ。

5 Vgl. Zijderfeld, Anton C: Humor und Gesellschaft. Graz Wien Köln: Stzria, 1976, S.

6 Vgl. Zijderfeld 1976, S.185.

インターネットという新しいメディアは私たちのコミュニケーションの形態に多大な影響を与えているが、今日のWitz研究においてインターネットの中のWitzサイトも見逃すことのできない現象である。インターネットのWitzはその即興性から、口頭伝達と活字となって出版される新聞などでの伝達の中に位置すると言える。

現在、インターネットの中のDDR-Witzに関連するウェブサイトは約550（2003年1月現在）存在するが、この中でもっとも代表的なサイトはDDR-Witz.deである。DDR-Witz.deは読者の投稿による500のDDR-Witzが番号をつけられて収集され、各々のWitzに関する解説、いつ誰から聞いたのか、さらには当時の社会の状況なども添えて説明されている。現在インターネットの中で多く存在するWitzサイトとこのDDR-Witzサイトとの違いは、前者ではWitzを語る動機が、おかしさや滑稽さ、「快感」の伝達であるのに対し、DDR-Witz.deでは、加えてWitzを国民的な財産つまり一種の文化財と見なし、それを収集し、記録しようという意図が明確に働いていることである。このサイトを立ち上げたインゴルフ・フランケ（Ingolf Franke）の言葉にはWitzを語り楽しむ文化が、当時、DDRの人々の間にどのように浸透していたかが鮮明に記されている。

DDRが消滅して10年が過ぎ、それとともにDDR-Witzの時代もまた終わってしまった。変革の後、確かにTrabi-Witzはいくつかあったが、結局その程度で終わってしまった。これは実際残念なことである。おもしろいDDR-Witzがいつも人々を愉快的気分させてくれ、誰にまだWitzを話してやろうかとわくわくしたものである。DDR-Witzはすばらしい民衆文化であった。

このインターネットサイトで私たちは民衆の文化を記録しようと思う。これらのWitzをただ列挙するだけではなく、DDR出身者だけにしか理解できないWitzにはその背景にある情報を提供することにした。（同サイトの後書き、「意義と目的」より）⁷

7 http://www.ddd-witz.de/sinn_und_zweck.htm（2002年12月5日アクセス）

当時の政治 Witz が DDR の民衆の文化であるという認識は旧東ドイツ出身者に共通したものであり、「失われた国」の民衆文化を記録するという試みは、統一後数多く出版された DDR-Witz 集という形をとってより確実な形で表れている。Witz の受け手はこれらの Witz によって今はもう存在しない国家のもっとも私的な部分、日常を追体験することとなる。これらの体系化された DDR-Witz の収集と記録という行為は、統一後圧倒的な支配力をもって東部ドイツを席卷し、大衆文化やメディアの中で東ドイツの文化を黙殺してきた「西」に対する旧東ドイツの人々の自己主張でもあり、さらには「西」の無関心と無視に対する「東」のコミュニケーションへの働きかけでもある。つまり収集された DDR-Witz を西の人々が読むことが視野に入れられているのである。

4. インターネットの中の DDR, Ostalgie?

オスタルギーという造語が統一後のドイツで DDR 時代の日常生活、および日常生活を伴っていたさまざまな「もの」への懐古的な愛着の意味で使われて久しい。シュテファン・ヴォレ (Stefan Wolle) はその著書『独裁制の聖なる世界』(Die heile Welt der Diktatur) でオスタルギーという現象の背後にある喪失感についてこう描写している。

まず独裁支配の不安や心に重くのしかかるような退屈さが消滅した。それから壁が崩れた。DDR のシンボルや制服がなくなり、際限なく続く警察の検問が、そして髭を生やしたマルクスの 100 マルク札が消えた [...] 安定した職がなくなり、集団の守られた温かさや、現実社会主義の極めて狭いけれど見渡しのきく世界が消滅した⁸。

ところがこの「失われた国」は統一後 13 年を経た現在、インターネットの中の数多くのサイトとなって、メッセージを発信し続けている。その代表的なものをここで紹介したい。

8 Wolle, Stefan: Die heile Welt der Diktator Alltag und Herrschaft in der DDR 1971-1989. München, Econ Ullstein List Verlag, 2002, S.16.

Zonentalk⁹

歴史家である Felix Mühlberg によって作られたサイトであり、「子供時代と青春時代」、「徴兵」、「仕事」など、さまざまな話題について自由な意見交換の場が設けられている。その他、Interzonentalk では、「政治的な会話」、「東と西のコミュニケーション」、「Wessi に関して Ossi の意見」、「Ossi に関して Wessi の意見」など、多くのテーマ別に西の読者も参加してのチャットが繰り返されている。その他、写真、DDR 時代の音楽、書籍についての情報も提供されている。このサイトは DDR の日常文化 (Alltagskultur) の対話式の記録集であり、東と西の人々の率直な意見開示の場でもある。

Die DDR im WWW¹⁰

人物、音楽、歴史、フォトギャラリー、書籍など DDR に関する情報を網羅し、オンラインの「DDR 百科」的な存在である。チャットやフォーラムの機会も提供されている。

Kost the Ost¹¹

社団法人 DDR 日常文化記録協会 (Verein zur Dokumentaion der DDR-Alltagskultur e.V.) によるサイトで東ドイツの書籍の書評、DDR 時代の製品マーケット、DDR 時代から変わらず残っている風景の写真展などから構成されている。

Baut die Mauer wieder auf.¹²

「もう一度壁を作れ。」というタイトルはむろん、このホームページの他の内容と同じくユーモアと風刺の産物である。短いエッセイの形での東西ドイツ人の軋轢に関する意見交換、Witz、フォーラムなどがある。

9 <http://www.zonenlink.de> (2002年12月15日アクセス)

10 <http://ddr-im-www.de> (2002年11月10日アクセス)

11 <http://www.kost-the-ost.de> (2002年11月10日アクセス)

12 <http://www.baut-die-mauer-wieder-auf.de> (2002年11月10日アクセス)

現実の国家としてのDDRは1990年に消滅したが、インターネットの中ではこのようにヴァーチャルな国家が依然として存在している。これらのサイトに共通するのはかつてのDDRの日常への徹底したこだわりと、記録し、残しておこうとする意図である。それは単に過去へのノスタルジーだけでなく、インターネットのページを当時の日常を伴っていたもので埋めていくことによって、統一ドイツの社会の中での自分の位置を探り出そうとする行為である。

4. 東ドイツの Identität

東ドイツ市民は統一前、つまり社会主義ドイツ民主共和国時代は集団の帰属意識を持たなかったとする見解がある。

DDRが生命を絶ってようやくDDR-Identitätとも言うべきものが生まれてきた。SEDプロパガンダが作り出そうとしたができなかったあの連帯感である。過去数年の間に運命共同体に属しているという感覚、そのメンバーがしばしばかつての (ehemalig) という形容詞で呼ばれる運命共同体に属しているという感覚が育ってきた¹³。

「運命共同体」に属しているという感覚の鍵を握るのはあくまで具体的な形で共有される日常の記憶である。SED政府は1974年の憲法改正を初めとして、ドイツというナショナルな概念を公的に排除し、労働者と農民による社会主義国家というイデオロギーにもとづいたIdentitätを生みだそうとした。その結果として、例えば1989年まで国際条約に関わっているという理由でその名を変更されなかった鉄道名、Deutsche Reichsbahnを除いてドイツという名は徹底的に抹消された。ライプツィヒのドイツホテル (Hotel Deutschland) はリングホテル (Hotel am Ring) に改名され、郵便切手には正式な国家名、Deutsche Demokratische Republikの代わりにその略語DDRのみが印刷されるようになった。さらには新マイヤー百科事典 (Meyers Neues Lexikon) の第2版からドイツという項目を完全に削除してしまったが、これは78年の第3

13 Wolle, S.136.

版で、7行ほどの注釈をつけて項目を復活させている¹⁴。このような徹底した試みにもかかわらず、政府自らが新しく作った概念、Volk der DDRの内実を埋めることはできなかった。

統一後東ドイツのIdentitätが形成されていく過程をリタ・クチンスキー (Rita Kuczynsky) は『東ドイツ人の復讐』(Die Rache der Ostdeutschen)の中で次のように分析している。統一当初、東ドイツの人々は生活の困難の原因を社会主義国家の崩壊に求めていたが、時間が経緯するとともにその意識は背景に退き、それに代わって東ドイツの人々が体験しなければならなかった困難、つまり西ドイツ人から受けた差別、個人や集団として達成したものを価値がないとされたこと、そしてすべてが西のシステムにとって変わってしまったことなど、また、東ドイツ人が求めたのは、物質的な面においても西ドイツ人と同等の扱いを受けることであったが、この要求が西ドイツ人に受け入れられなかったことなど、これらの体験は、拒否と「西」に対する境界線引きとなって表れた。それが結果的にOst-Identitätという形で現れ出ることとなったのである¹⁵。いわゆる「心の壁」は、このような過程を経て形成された西ドイツと西ドイツ人に対する集団的境界線引きの結果として表れた現象であると言えるだろう。これはOssi-Witzの中でも顕著に観察される現象である。

1993年頃から表れ始めた一連のオスタルギーという現象は単なる個人的なノスタルジーではなく、かつてのDDRにおける日常生活を伴っていたさまざまな「もの」や「経験」、そしてそれらが作り出す「雰囲気」を再現し、追体験することによって同様の運命を負った「仲間」との連帯感を確認する場や機会となっている。つまりオスタルギー現象は東ドイツの人々が統一後の社会の中で自分の位置を確認し、「自分は何であるのか。どこから来てどこへ行くのか。」という根元的な疑問の答えを模索する、つまりIdentität形成の一つの答えを与えようとしているものではないだろうか。そしてそこに再現された「世界」に対する感情を共有することによって、「私」が「我々」という意識に拡大されていくのであ

14 Wolle, S.98.

15 Kuczynsky, Rita: Die Rache der Ostdeutschen. Berlin: Parthas, 2002, S.8-12.

る。

Ost-Identitätのよりどころは1990年に正式に消滅したDDRであるが、それは歴史的な事実としての社会主義国家DDRではなくて、取捨選択されたシンボルやコードからなるヴァーチャルな国家である。インターネットというそもそもヴァーチャルな世界でDDRに関するサイトが開花しているという事実自体、この国家の虚構性、さらにそれを基盤として創造されるIdentitätの虚構性を示していると言えるだろう。

しかしIdentitätの基盤となる国家像が歴史的な事実に基づいたものであるか、虚構の産物であるかは、ここでは重要な問題であるとは思えない。なぜならIdentitätを形成する重要な要素がHeimatであるならば、Heimat自体が個人の主観の中に存在する感情世界であり、そこでは記憶の中で情報の選択が行われ、呼び起こされ、脚色されて再構築されるからである。

5. まとめ

Witzは社会文化的な現象であるが、Witzを語り笑うという行為は集団のIdentitätと深く関連している。Ossi-Witzはエスニックジョークであり、その多くは社会的現実を反映した悪態の応酬であるが、同時に、Witzの中で笑う側と笑われる側の関係にある西と東のコミュニケーションの一つの形であろう。独裁体制下で密やかな楽しみとして語られていたDDR-Witzは、安全弁的な性格と、Witzを語り笑う集団のアイデンティティ創出と確認の性格を色濃く帯びている。Witzの内容自体は、そのWitz独自のものではなく世界中のWitzは約40の内容パターンに集約されると言われるが、Ossi-WitzもDDR-Witzもほとんどがそのパターンの枠をでない。しかし、これらのWitzで注目すべきことは、DDRという今は消滅した国家とかつてその国家の住民であった人々のWitzであるということである。特に、DDR-Witzにおいては民衆の文化であり、記録され、伝えられるべきものであるという認識が顕著である。Witzは現代のVolkserzählungであるという定義を近年もっとも明らかに示した例であろう¹⁶。そして、このDDR-Witzもまたインターネットの中で数多く

16 Röhrich, Lutz: Der Witz. Stuttgart. 1977, S. 19.

開かれているDDRの日常文化に関するサイトと同じく、東ドイツ出身の人々のIdentität形成の重要な要素となっている。Identitätの模索はHeimatの模索でもある。そのHeimatは「失われた国家」、DDRという形をとって表されているが、厳密には人々が帰属していると想定し、またその世界を構成するさまざまな事柄に意味づけをしている主観的かつ虚構の世界であり、実際はどこにも存在したことの無い場所である。その主観的なHeimatの集合体がインターネットの中で作り上げられているのである。Heimatという概念が、しかし非常に危険な側面も持っていることは、歴史的事実としても明らかであり、オスタルギーの現象に関しても懸念を示す声もあるが（DDRの体制下での国家としての犯罪の無害化）、その危険性に言及して、道義的価値判断に基づき警告をすることはこの論文の主旨とは直接関係がないので控えた。インターネットのなかに展開されるHeimat, DDRは、今後、さらに時間がたつにつれてどのような形に変わっていくのか。記憶を共有する人々の数の減少とともに、インターネットの中の豊富でリアルなDDRの姿は収縮、やがては消滅し、単に歴史の教科書の一つの項目になってしまうのだろうか。

日本にはふるさととは遠きにありて思うものという言葉があるが、インターネットの中の失われたDDRというHeimatは、誰もの生活の中、部屋の中でパソコンのキーをほんの数度たたくことによって呼び起こされる「近さ」にありながら、もはやそのインターネットの中にしかなく、同時にどこにも存在しない世界である。

[Witzには著作権がないと言われるが、この論文で使用したWitzに関しては、筆者が聞いたものをのぞいては、Witz集として出版されたものとインターネットから引用した。]

使用したWitz集

10 Jahre sind zu viel. Berlin: Eulenspiegel, 1999. (g)

Ossi-Witze. Berlin: Eulenspiegel, 2001. (a,b,c,d,f,j)

So lachte man in der DDR: Eulenspiegel, 2001. (o)

直接の伝聞によるもの (e,h,i)

インターネット (DDR-Witz.de) から (k,l,m,n)

Der Ossi-Witz und DDR-Witz

— Heimat im Internet —

Hiroko SATO

Der Witz ist ein soziokulturelles Phänomen und spiegelt die Realität der Gesellschaft oder unausgesprochene Wünsche seiner Menschen wider. Ausserdem hängt das Witzerzählen mit der Gruppenidentität, bzw. dem Wir-Bewusstsein zusammen. Seit dem Fall der Mauer ist der Ossi-Witz ein neuer ethnischer Witz in Deutschland. Wie bei allen anderen ethnischen Witzen behandelt er Stereotypen, in diesem Fall: Ost- und Westdeutsche. Er thematisiert die wiedervereinte deutsche Gesellschaft und teilt die Protagonisten in drei Kategorien ein: Wessi, Ossi und Ausländer. Oft ist der Ossi-Witz mit erbarmungslosem Humor gegen eine Gruppe gekennzeichnet. Die Aggression des Auslachens scheint jedoch begrenzt. In Wirklichkeit fungiert der Witz eher als eine Art der Kommunikation zwischen Ossis und Wessis in der Witzwelt. Denn nicht nur die Ossis werden im Witz belacht, sondern auch die Wessis, das Feindbild der Ossis, werden als arrogant, geizig und hoffnungslose Materialisten dargestellt und somit zum Witzobjekt.

Der DDR-Witz war der politische Witz im diktatorischen Regime. Er fungierte als Ventil, schaffte und bestätigte die Gruppenidentität in der unterdrückten Situation. Es gibt aber in den letzten Jahren das Phänomen, dass im Internet diese politischen Witze systematisch gesammelt und registriert werden. Dabei besteht ein Konsensus unter den Witzerählern und Rezipienten, dass der politische Witz der DDR „Volkskultur“ sei und deswegen gesammelt und überliefert werden soll. Neben dem DDR-Witz gibt es im Internet auch unzählige Webseiten über die DDR, in denen die Alltagskultur und verschiedene Gegenstände präsentiert, auch einstige DDR-Produkte angeboten und Erinnerungen aus der Vergangenheit getauscht werden. Sowohl solche Webseiten als auch die Witze hängen eng mit der Identitätsbildung der

Ostdeutschen zusammen, die sich in der wiedervereinigten deutschen Gesellschaft zu orientieren suchen. Die Suche nach der Identität ist gleichzeitig die Suche nach der Heimat. Die gesuchte Heimat hat in diesem Fall die Form des verschwundenen Staates, der damaligen DDR, von der man sich vor dreizehn Jahren verabschiedet hat. Die Heimat ist aber eine virtuelle Gefühlswelt, die nirgendwo existiert und von der man sich vorstellt, dass man dahin gehört und deren Komponenten man besonderen Sinn gibt. Somit hat diese virtuelle Heimat ihren idealen Platz gefunden im Internet, das selbst ein virtuelles Medium ist. Wie sich die virtuelle Heimat als DDR im Internet weiter entwickelt, weist uns auch darauf hin, in welcher Weise die Integration beider „Deutschen“ realisiert wird, und deshalb lohnt es sich, diesen Prozess zu verfolgen.